道徳部会　研究の構想（案）

令和６年度～

Ⅰ　研　究　主　題

道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳科の授業はどうあればよいか。
―主として集団や社会との関わりに関すること―

Ⅱ　主題設定の趣旨

社会の変化が加速度を増し、複雑で予測が困難になってきている。このような変化の時代において、学校教育には一人一人の生徒が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。

学校における道徳教育は、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする教育活動であり、社会の変化に対応し、その形成者として生きていくことができる人間を育成する上で重要な役割をもっている。道徳教育の目標に基づき、道徳科で目指す道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てるためには、生徒一人一人が生きる上で出会う様々な道徳上の問題や課題を多面的・多角的に考え、主体的に判断し実行していく学習が必要である。「考え、議論する道徳」が必要とされるゆえんである。

本県の生徒の実態を全国学力・学習状況調査の生徒質問調査から見てみると、「人が困っているときは、進んで助けている」生徒の割合は９割に達しており、道徳的心情が育ってきていることが分かる。しかし、「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいる」と答えた生徒が９割を超えているものの、「学級の生徒と話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている」と答えた生徒の割合は全国平均を下回っている。これらの結果から、「考え、議論する道徳」に向けて改善の余地があることがうかがえる。

令和２年度までは「主として自分自身に関すること」、令和５年度までは「主として人との関わりに関すること」を副題として設定し、「多様な意見を引き出すための発問の工夫」や「考えの深まりを目指すための話合いの場の工夫」、「指導に生かすための生徒と教師の評価の工夫」を視点として研究に取り組んできた。そこで、令和６年度から８年度までの３年間は、「主として集団や社会との関わりに関すること」を副題とし、研究を進める。また、「考え、議論する道徳」への転換を図るため、年次ごとの重点を「考え、議論する道徳」にするためにはどのようにしたらよいかという視点で設定し、研究を進めていきたい。

Ⅲ　研究のねらいと内容

１　研究のねらい

主として集団や社会との関わりに関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める生徒を育てるための授業の在り方について、実践的研究を通して明らかにする。

２　研 究 内 容

⑴　年次ごとの重点研究内容

2024年度（令和６年度）…「考え、議論する道徳」に向けた発問の工夫
2025年度（令和７年度）…「考え、議論する道徳」に向けた場の工夫
2026年度（令和８年度）…「考え、議論する道徳」に向けた授業展開の工夫

⑵　道徳科の授業を構想するための方策

⑶　道徳科の授業に生かす指導方法の工夫

道徳部会　令和７年度研究計画（案）

Ⅰ　研　究　主　題

主として集団や社会との関わりに関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳科の授業はどうあればよいか。
―「考え、議論する道徳」に向けた場の工夫―

Ⅱ　主題について

令和６年度から、内容項目の四つの視点のうちの「Ｃ　主として集団や社会との関わりに関すること」を中心として、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める生徒を育てる道徳科の授業について研究を推進している。

令和６年度は、「『考え、議論する道徳』に向けた発問の工夫」を副題に研究を進めたところ、吟味された発問によって生徒の思考が促され、意見が活発に出されることが分かった。また、適切な問い返しによって、問題となっていることや考えるべきことが明らかになることも分かった。しかし、せっかく出された生徒の意見も、教師と発言した生徒のやり取りだけで終わってしまい、全体の議論につながっていないという状況が多くみられた。また、問い返しが不十分だったために深まりが足りなかったり、論点が定まらないために議論が成立しなかったりする状況もみられた。

令和７年度は「『考え、議論する道徳』に向けた場の工夫」を副題に設定する。道徳科では、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることを目標としている。しかしながら、登場人物の心情理解に終始するような学習だけでは、そのような道徳性の諸様相を育てることは難しい。教材の主題を自分との関わりで捉え、自己を見つめ直す学習が必要である。そこで、他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とし、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人が自分自身の問題と捉え、向き合う「考え、議論する道徳」を実現することが、「主体的・対話的で深い学び」を実現することになると考える。道徳科の授業において「考え、議論する」ためには、議論の場を工夫する必要がある。生徒から出される意見や考えは、議論を経て磨かれることによってより深いものになっていくからである。生徒の道徳性の高まりは、教師の適切な働きかけと生徒同士の議論によって得られるものと考える。

また、多様な方法を取り入れた指導の一つとして、問題解決的な学習も引き続き積極的に取り入れていきたい。生徒の学習意欲を喚起し、道徳的諸価値に関わる問題や課題を主体的に解決し、よりよく生きていくための資質・能力を養うことができるからである。「考え、議論する道徳」を通して、主体的・対話的で深い学びを得ることができる道徳科の授業を目指し、実践的研究を進めていきたい。

Ⅲ　研究内容とその視点

内容項目の四つの視点のうち、「Ｃ　主として集団や社会との関わりに関すること」を中心とした道徳科の授業において、どのような学習活動を行うことで、自己を集団や社会との関わりにおいて捉え、物事を広い視野から多面的・多角的に捉える考えを引き出し、道徳的価値や人間としての生き方についての考えを深める授業となるのかを実践を通して明らかにする。そのためには、本時のねらいを明確にした上で、生徒の道徳的価値や判断を揺さぶる発問の計画、考えたり議論したりする場面の設定を含む全体的な授業構想が重要な視点となる。

１　道徳科の授業を構想するための方策

⑴　ねらいの明確化
- 授業のねらいを明確にすることで、学習内容を焦点化し、議論の道筋、着地点を想定する。
- 道徳科の内容項目を基に、その教材でこそ目指すことができる具体的なねらいを設定する。

⑵　議論する場の工夫
- ねらいに即して、議論する場面を適切に設定する。
- 教師と生徒の一対一のやり取りに終わることなく、全体に対して問い返すなど、教師が進行役（ファシリテーター）となり、論点を整理して議論を進める。

・全体で議論する場合は座席を向かい合わせるなど座席の配置を工夫する。
・意見の違う生徒同士で班を編制するなど、議論が活発になるような意図的な班編制を工夫する。
・学校や学級内の人間関係や言語環境を整え、一人一人の生徒が安心して意見を述べ、互いに学ぼうとする環境づくりに努める。

⑶　発問や問い返しの吟味
・生徒が道徳的諸価値と関連付けながら、教材に含まれる望ましい社会や人間としての生き方についての考えを深め、よりよく生きようとする意欲を高められるような発問を吟味する。
・教材に登場する人物について、他人事として発問するのではなく、「登場人物はどうするべきだろうか」「あなただったらどう思うか」「あなたは登場人物のようにすると思うか」「別のやり方はないだろうか」「今後どうしたいか」などと主体的に考えられるような発問を考える。
・生徒の思考を予想し、それに沿った発問や、考える必然性のある発問、多様な思考を促す発問、物事を多面的・多角的に考えさせる発問となるよう工夫する。

⑷　指導と評価の一体化
・生徒の学習状況及び成長の様子についての評価と授業に対する評価の両面から評価を進めていくことで、指導と評価の一体化を図る。

２　道徳科の授業に生かす多様な指導方法の工夫

⑴　多様な方法を取り入れた指導

①問題解決的な学習の工夫
・教材に含まれる道徳的問題を明らかにし、分析する。
「何が問題なのか」「なぜそれが問題なのか」「解決すべき問題は何か」
・解決策を考える。
「登場人物はどうすべきか」「自分だったらどうするか」「人間としてどうすべきか」
・解決策を吟味する。
「本当の原因（根拠）は何か」「その結果どうなるか」「いつでも、どこでも、誰にでも当てはまるか」「それでみんなが幸せになれるか」

②体験的な学習等を取り入れる工夫
・具体的な道徳的行為の場面を想起させ追体験させることで、実際に行為することの難しさと理由を考えさせたり、道徳的価値の自覚を促したりする。
・教材に登場する人物の言動を即興的に演技する役割演技等で疑似体験的に表現することで、具体的にどのように行動したり発言したりする自分でありたいか考えたり、よりよい解決策を考えたりすることができるようにする。

⑵　指導方法の工夫

①書く活動の工夫
・書く活動を取り入れ、生徒が自ら考えを深めたり、整理したりする機会とし、道徳的価値の理解を基に自己を見つめることができるようにする。
・生徒の感じ方や考え方を捉え、個別指導を進める機会になるようにする。
・生徒の学習を継続的に深め、生徒の成長の記録として活用したり、評価に生かしたりする。

②板書の工夫
・生徒の考え方や感じ方の違いや多様さを対比的、構造的に示したり、中心部分を浮き立たせたりするなど、教師のねらいを明確にして板書を工夫する。

③ＩＣＴの活用
・学習のねらいや目的を明確にし、多様な考えを把握したり、意見を共有したりするための手段としてＩＣＴの効果的な活用を図る。

Ⅳ　研　究　方　法

1　研究主題を主体的に受け止め、各学校で日々の実践を通して研究主題の解明に努める。
2　各学校での実践資料や成果等を持ち寄り、各郡市、地区ごとに研究を進める。
3　各郡市、地区ごとに研究の視点を明確にし、研究授業、研究協議を通して、指導法の実践的研究を進め、主題の解明に生かす。
4　各郡市、地区ごとの研究結果を踏まえ、情報を交換し、次年度以降の研究に生かす。

2025